

一番茶のみの摘採に適した効率的な茶園更新管理体系



写真1 7月上旬のせん枝作業

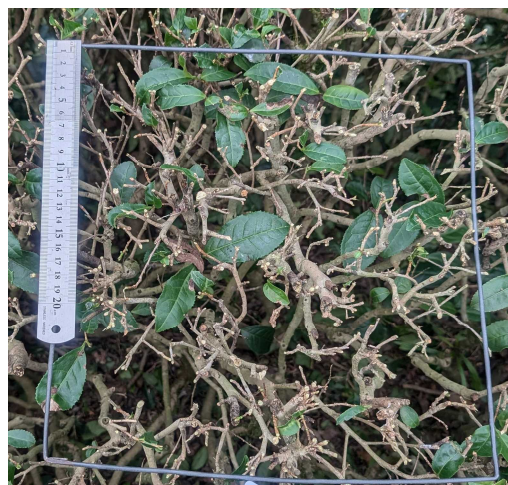


写真2 せん枝後の樹冠面

表 せん枝時期と翌一番茶の収量構成要素、収量、全窒素量

せん枝時期	芽長 (cm)	葉数 (枚)	百芽重 (g)	出開度 (%)	芽数 (本/m ²)	収量 (kg/10a)	全窒素量 (%)
6月第3週	3.1	2.7	36.2	67	1,333	483	6.3
6月第4週	3.3	2.9	36.6	68	1,267	464	6.6
7月第1週	3.4	2.8	42.2	81	1,192	503	6.3
7月第2週	4.1	3.1	48.2	79	1,133	547	6.3
7月第3週	3.1	2.9	41.3	84	1,133	468	6.2

本県の一番茶のみを摘採する生産者は、6月下旬から7月上旬に毎年同じ高さで浅くせん枝する枝条管理が一般化しています。そのため、枝条が減少し、それにともない芽数や芽重も少なくなるため、収量減少や品質低下が問題となっています。

そこで、茶業試験場では、一番茶摘採後にせん枝しても収量・品質が低下しない新たな茶園更新管理体系の確立に取り組んでいます。

今回の試験では、一番茶摘採後のせん枝の最適な時期を明らかにするため、せん枝時期を6月第3週から7月第3週までの1週間ごとにせん枝した5つの試験区を設け、翌年一番茶の生育に及ぼす影響を調査しました。

その結果、7月第2週にせん枝した区では芽長、葉数、百芽重および収量が優れ（表）、芽の生育が良いことがわかりました。また、7月第2週にせん枝することで、次の新しい芽ができる時期が梅雨明け以降になるため、重要病害の一つである炭そ病の発生リスクが軽減される可能性が示唆されました。

以上のことから、一番茶のみを摘採する場合の一番茶摘採後のせん枝は、7月第2週頃が最適と考えられました。今後は引き続き、最適なせん枝時期を調査するとともに、最適なせん枝の深さについても調査します。

(茶業試験場 渡邊一以 0889-32-1024)